

NZ から学ぶこと

桜花学園大学保育学部国際教養こども学科

准教授 田端 智美



私の所属する桜花学園大学は、2018年に保育学部国際教養こども学科を開学した。この学科では、日本と海外の保育を学修する。そして、世界の保育・幼児教育に貢献できる人材を育成する。

1年次の夏休みには、NZにおける海外フィールドスタディ（2週間）の履修が必須である。このフィールドスタディで学生は、NZの保育園・幼稚園において実習を行う。2018年の夏、私はこのフィールドスタディに引率者として参加した。NZの北島ハミルトン近郊の保育園・幼稚園18園を実習巡回した。学生に対し実習の助言・相談を行ってきたのであるが、その際、保育園・幼稚園で行われていた表現活動についての視察も行ってきた。NZの国の特色を活かした表現活動について報告する。

1 NZのナショナルカリキュラム『テ・ファーリキ』について

現在、世界的に国連サミットで採択された『持続可能な開発目標（The global goals for sustainable development）』（略:SDGs）を達成するために保育・幼児教育が行われている。NZも然りナショナルカリキュラム『テ・ファーリキ』とともに、このSDGsの元、保育・幼児教育が行われている。このSDGsについて、NZでは、子どもこそが最大の権利主体者であり、この持続性について学ぶ必要があるとのこと考えている。また、次の世代へNZの豊かな自然や文化をつなげることが、最大のゴー

ルであると考えている。2017年の『テ・ファーリキ』改定においても、SDGsと関連して、「環境の持続可能性」「文化と言語の持続可能性」という2つが大きな柱となっている。

『テ・ファーリキ』とは、1996年に交付されたNZの保育・幼児教育におけるナショナルカリキュラムである。その後2017年に改訂版が交付された。「テ・ファーリキ」とは先住民族マオリの言葉で「敷物」を意味する。敷物の縦糸と横糸があや織のように交わることが、子どもの全人的な発達観を表している。「テ・ファーリキ」には4つの原理（エンパワーメント Empowerment, 全体的発達 Holistic development, 家族とコミュニティ Family and community, 関係性 Relationship）がある。また5領域（所属 Belonging, ウェルビーイング Well-being, 探求 Exploration, コミュニケーション Communication, 貢献 Contribution）がある。これらの原理と領域を基本理念として、NZでは保育・幼児教育が行われている。私は、昨今の日本の保育指針・幼稚園教育要領の中に同じような言葉が並んでいると感じている。しかし、日本における5領域（環境・人間関係・言葉・健康・表現）の中にある「表現」という言葉は見受けられない。私たちが一番関係している「表現」という言葉が見受けられない。「表現」はどこに関係しているのか。私が考えるに、関係しているキーワードとして「文化」「環境」「持続可能」という言葉があった。



写真1：『ティ・ファーリキ』（2017年版）



写真2：SDGs

2. 文化

ここでNZの人が特に大切に考えているマオリ文化について紹介する。マオリとはNZの先住民族である。最近ではラグビーW杯におけるNZチーム「オールブラックス」のハカが記憶に新しいところである。ハカは、マオリ族の戦いの叫びである。私もNZの保育園・幼稚園でマオリ式の歓迎の挨拶、踊り等たくさんの儀式を経験した。また訪れた時はちょうど「マオリ語週間」で挨拶や絵本の読み聞かせで、保育園・幼稚園ではマオリ語であふれていた。子どもは当たり前のように「キア・オラ（こんにちは）」と挨拶し、マオリ語の絵本を読んでもらい、少々のマオリ語理解と挿絵を結びつけ

て鑑賞していた。また表現活動の際には、マオリのシンボルであるシダ植物をモチーフにしたステンシルで遊んでいた。このように NZ 人はマオリ文化を生活の中に受け入れ、心に深く留めている。子どもにおいてもマオリの文化を通しての表現活動を毎日のように行なっており、自らの文化を大切に育っている。



写真3 シダ植物のステンシルの様子



写真4 マオリの装飾をモチーフにした造形

3. 環境

NZ では環境における参加型・体験型の保育・幼児教育を大切にしている。食用植物の栽培、自然環境への遠足、リサイクル活動、廃棄物削減など様々な活動がみられた。保育園・幼稚園では、リサイクル活動について、廃棄物の仕分けが細分化されていた。近年は日本でも、リサイクル活動から子ども自身で材料を集め、表現活動に用いている。NZ では分別の段階から徹底して子どもが行っており、それを制作コーナーに材料として配置していた。そして子どもがその材料を自由に用いて表現活動を行うことがなされていた。また自然の中で集めた材料（木枝・木の実など）をモチーフとして、絵の中に組み入れ装飾物を作る表現活動もなされていた。

マオリの価値観に Kaitakitanga(マオリ語・後見性の意)というものがある。Kaitakitanga とは、場所、事柄、人々を見守ることを言う。子どもが環境の中で後見性を発揮できるような機会を得た時、それは人間形成に繋がっていくと考えており、環境こそが教師であると考えている。保育者は、子どもに NZ の自然環境のことを誇りに思い、敬意を持つように伝えている。そして保育・幼児教育の中にマオリの自然観を組み込み、生態系と人間の関係が持続していくことに伝えている。表現活動もその一環であり、環境と共存して行われている。マオリ文化における神聖な山や川をモチーフとして表現活動を行ったり、リサイクルとは持続可能な環境づくりであることを考える表現活動を行ったりしている。



写真5. 制作コーナーのリサイクル



写真6. 後見性についての表現活動

4. 持続可能

最後に「持続可能」について述べる。NZでは、表現活動において自主性を大切にしている。A園では、保育者により表現活動のための材料や用具は机の上に整えられてはいるが、活動に参加する・しないは子どもの自主性に任されている。表現活動に興味を持っている子どもは、保護者が家に持って帰る作品袋がいっぱいであったが、興味が少ない子どものそれは薄かった。表現活動においても、保育者が考えたものを子どもに与えるのではなく、子ども自身が計画して行動していくことが重要であると考えられている。表現活動がマオリ文化や環境の中に組み込まれていることは先に述べたが、未来へ続き、持続可能であるために、子ども自身が計画して行動していくことが重要であると考えられている。表現活動は「持続可能とは何か」を考える一環である。その思考力・判断力を養うための一環である。



写真7. 作品持ち帰り作品袋



写真8. 保育室の様子

5. まとめとして

2017年改正の保育指針・幼稚園教育要領には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「10の姿」が示された。そこには「豊かな感性と表現」という言葉があるが、NZでは、それに至るまでの過程として、文化・環境・持続可能ということを捉えていると感じた。

私は旅行好きである。文化に触れるために旅行をしていると言っても過言ではない。NZでは文化に触れるだけでなく、その精神に触れた。私たち日本人も、子どもと共に、文化とその精神を含めた表現活動を行なっていく必要があると感じた。

(2019年11月25日)